島根県立図書館報

圖書館たより

号数　第50号
発行日　昭和56年2月10日
編集
発行　島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL(0852)22—5725
印刷　渡部印刷

おながどりは　おゆうの　いき
ながいあいだの　ゆめを　むすん
おゆうの　たからもの。
だが、もうすぐ、おしろの　と
さしあげる日が　やってくる。
（わかれるのは　つらいけれど、
うつくしい　すがたを、たくさ
ひとたちに　みてもらえるのだ
おゆうは、なんども　なんども
さよならを　いった。

（「おゆうとおながどり」より）

読書の習慣

島根県知事　恒松制治

久しぶりの雪の正月、きびしい寒さの中で身のひきしまる新春であった。年末から新年にかけてのまとまった休息時間に、平素読めなかった書物を読むことができ、二重の充実感を味わうことができたのは幸せであった。

そのときしみじみ思ったのは、私共の生活は物の豊かさという点ではほぼ満足すべき水準になったのだから、これからは心の豊かさを求める方向にむかうべきではなかろうかということであった。戦後30年ひたすらに物の豊かさを追い求めるあまり、心の豊かさを失った。その限りでは戦前の物の不足した時代が幸せであったのかも知れないとさえ思えるのである。

心の豊かさを求める手段として読書がある。大田中学校から東京の武蔵高校（旧制）に進んだとき、まっさきに劣等感をおぼえたのは私の読書量の少なさである。中学と高等学校が一貫したこの学校では、私たちが受験勉強に明け暮れた時間を広い読書に使っていたからである。当時夢中になって本を読んだことを今でも想いおこす。

映画ぐらいしか娯楽のなかった生活が読書の楽しみを与えてくれたのであろうが、おそらく生涯を通じて私を豊かにしてくれたであろうと思う。読書は一種の習慣でもある。幼いとき母親が読んでくれる「おとぎ話」は子供たちに大きな夢を与える。その夢を求めて子供たちは活字を求め、本と親しむのである。

現在はある意味では活字があふれすぎている。新聞の紙面も昔に比べれば何倍も多い。雑誌週刊誌は正に無数、書店には置き場のないほどの新刊書、こういった現象は読書をすすめることの矛盾を感じさせる。あまりにも豊富すぎることが真剣な読書を妨げることになるのかも知れない。そうした矛盾を感じながら、今さらのように読書の習慣をすすめたい。心の豊かさを保つために。

親子読書講演会開催

その記録から

当館では、昨年にひき続き本年度も親子読書をテーマに松江市、横田町、斐川町および江津市、瑞穂町において昨年11月に講演会を催しました。講師は、児童図書館研究会長、小河内芳子、こぐま社社長、佐藤英和の両氏で、それぞれの立場から「親子のふれあい」についての示唆に富んだ話があり、盛会のうちに終えることができました。

人間形成に欠くことのできない読書は、幼少期に習慣づけることが最も重要であるといわれています。親子読書という素晴しい読書活動に、家庭で、図書館で、学校でそれぞれの立場で積極的にとりくんでいただくため、講演の概要を紹介します。

子どもと本 ―未来のこどもたちのために―

小河内　芳　子氏

●かけがえのない成長の日々に

椋鳩十氏が小学生を対象に提唱された「母と子の20分間読書」が今年で満20年を迎えました。その間「本好きの子どもがふえた」「親子の対話が豊かになり非行が激減した」「学力の面にも効果が表われた」など種々の成果とともに、反省点として「子どもを本当に本好きにするには、もっと以前から絵本に親しませた方がよい」という論が強くあがりました。これが斎藤尚吾氏を中心とする「日本親子読書センター」の設立につながり「幼児に絵本を読んでやりましょう」という運動が展開され現在に至っているわけです。

子どもは生まれてから3～4才までが最も大切といわれています。それは、この間が、人間として最も大切な“ことば”を習得していく時期だからです。この時期に母親や肉身たちの溢れる愛情の中で語りかけることばが、子どもの人間的な全面発達を助けるのです。幼児は本来好奇心旺盛で、これは何？あれは何？と聞きたがるのも、ことばを習得するための自然の働きともいえます。だからこの期に周囲の者が心をこめて応答して、この好奇心を満たしてやり、さらに興味を刺激して、毎日毎日をできるだけ充実してやることが豊かな人間づくりにつながります。それができるのが絵本であり、昔話であるのです。

●絵本・昔話がこどもに与えるもの

絵本は実によく子どもの心理をとらえています。美しい絵と単純のように思える短いことばのリズムの中に、こどもの興味を刺激し共感させるものをもっています。同じ本を何度も何度も聞きながら、ああなってこうなって…と先がわかっていながら、そのことばのリズムに酔って聞いているのです。また知っているからこそ安定感があり、いっそう楽しいのでしょう。大人でも、大好きな曲を何度も聞いて楽しむ、同じ落語を何回も聞いて同じ所で笑う、などに共通する楽しみです。子どもの場合それがいっそう強いといえます。くりかえし聞いているうちに子どもは、すっかり主人公に同化し、絵本の中でいろいろなことを体験します。実物はわからなくても絵本で体験するのです。その強烈な印象が実物なり実際の経験とぶつかり合いながら認識を深めていきます。絵本でなければ味わえない想像の世界、絵本と体験の間でゆれ動く心の躍動、それが子どもの心の遊びであり、子どもの心を豊かにしてくれるものです。絵本はそういう働きをしてくれます。

伝承されてきた昔話の価値も今見直されています。昔話は本来口伝されてきたものであるから、ことばのリズムが非常にいいのです。そして単純な語り口の中に案外深い人生のようなものを語っています。人間の内面的な問題を訴えて、それぞれの主人公がいかに生きるか、ということを考えさせるものです。子どもも3～4才になると話すことばも長くなり、物ごとの因果関係もわかるようになる、その頃が昔話と出会わせるタイミングのようです。くりかえしくりかえし語り聞かせるなかに子どもなりに主体的に生きることの意義を考えるのではないでしょうか。

●絵本はたからもの

数年前、イギリスのある家庭に行った時、その家のおばあちゃんが「これは私の宝物です」といって自分の部屋から持ってこられたのが「ピーターラビットの絵本」でした。これは 100年近い歴史をもつ絵本です。小さい時に読んでもらった絵本の楽しさは一生涯忘れられないものであることを物語るものです。よい絵本をゆっくり読んで、ゆっくり見せて、ゆっくり考えさせ、子どもの心の中に楽しみをたっぷりしみこませていただきたいと思います。

子どもの読書を考える
―本が子どもに与える大切なもの―

佐藤英和氏

●「聞く耳を育てる」

聖書の中に、種まきの話がでてきます。それは、良い土地に落ちた種は実っていくが、石地やいばらの中に落ちた種は実らなかったというお話で、「聞く耳のある者は聞け」というたとえ話です。

これは、子どもの読書にも同じことがいえます。即ち、言葉を聞くことの大切さ、それは、まいた種が実るか否かの問題です。いくら読んでやっても、聞く耳がないのは、種が実らないのと同様、むなしい感じがします。

たとえば、最近の子どもは、お話の時間でも顔は無表情で反応がありません。私が主宰する文庫に入って来る時も極めて事務的です。また、以前に自分の借りた本を忘れて、再度借りることもあります。

今や、子どもは本を読んで実を結ぶことがあるのでしょうか。心が石地やいばらで荒廃しているのではないでしょうか。それならば、子どもの心の土壌を良い土地に耕して作り変えてやることこそ、大人の使命です。

●子どもにとって本を読むことの意義

本を読むことの第一の条件は、耳から聞く言葉を理解することです。よく、本を読むとは文字が読めることだと考えている人がいますが、実はそれ以前に人の話を聞くということが大切な条件です。

人間の歴史を考えた場合、15C初期、グーテンベルクが印刷技術を発明して始めて本が普及しました。それ以前の子どもたちの、今読むような本の内容は、口で語られ、耳で聞く昔話でした。つまり、文字、本がある以前に昔話があり、耳から言葉を充分に聞いたわけです。

本来、言葉には人格があり、人格関係のある中に言葉はありました。一方、機械から流れる言葉には人格はありません。意味を持たない言葉・人格を失った言葉が氾濫するテレビ社会の現実で、今こそ、人格をもった言葉でお話をしてやらねばなりません。本を読む子に育てたいと願うならば、まず、母親が人格をもった言葉でお話を聞かせることです。

●絵本は子どもがはじめてであう本

⊙絵本の絵を読む

文字が読めない子どもは、どのようにして絵本を読むでしょうか。子どもは、絵本の絵を読みます。絵が物語を語ってさえいれば満足します。それは、絵が言葉の役割を果たし、場面と場面を結びつけて次の場面を表現しているからです。このようにして字が読めない子どもでも絵を読みとり、物語を読むことができます。

子どもは、絵でなければ伝えられない物語を読むことによって初めて本と出会います。それが絵本です。その本の中で、期待したり、ハラハラしながらお話を聞き、想像する楽しみの量が、本を読んでいくことの原動力となります。

くり返しくり返しお話を聞き、本を読んでもらっているうちに、初めて自分で本が読めるようになります。

自分で活字の本が読めるようになるには、この過程をしっかりと踏むことがポイントです。

⊙絵本に年令はない

年令標示をしてある絵本がありますが、本を年令を限って与えても良いのでしょうか。年令標示がしてあると、その年令より上の子どもは恥ずかしくて借りないこともあります。自分で本を読み始めたその時は、もう一度赤ちゃんの本から読むこともあります。

子どもたちの本箱には、年令にふさわしい本だけを置いてはいけません。もっと豊かな幅広い蔵書構成をしてやるべきです。何故なら、子どもは発達段階で幼くなったり成長したりします。それぞれの気持になった時、取るべき本が本箱にあったならどんなに幸せでしょう。

今や、大人は子どもに豊かな読書環境を備えてやるために力を注がねばなりません。そして、子ども自身の良い本に手を出そうとする力と、良い絵本の子どもに訴える力とを出会わせてやり、子どもたちの心にすばらしい何かが起きることを信じたいものです。

海外情報資料コーナー新設!!

ブラウジングコーナーの一角に「市町村ガイドコーナー」を設けて2年になります。県内59の市町村が発行する要覧、広報、観光パンフレット等を市町村別に分類・配架して、自由に閲覧していただくコーナーですが、たいへん好評をいただいています。

県内市町村の情報と同様に、世界各国の情報が国別にまとめてあれば便利ではないでしょうか。近年多くの方々が海外に出かける機会を得られるようになりました。また仕事の関係で今までよく知られていなかった国々や地域を調査される必要も多くなってきました。当館へもこうした方々が、資料を求めて来館されます。当館では今度、「市町村ガイドコーナー」と同様に、ブラウジングコーナーの一角に「海外情報資料コーナー」を新設しました。

当館では、以前から世界のどこの国でも、最新の情報を整備したいと考えてきました。各国別の観光ガイドブックや毎年刊行される『世界年鑑』の「列国の現勢」の章を開けばある程度の情報を得ることはできます。しかし、国内で刊行されるこれらの資料は種類も少なく、すべての国を網羅しているわけではありません。よく知られている特定の国や地域に限られているきらいがあります。そこで、海外情報資料の充実をはかるため、昨年末、在日の各国大使館 100館に自国を紹介した資料の寄贈を依頼しましたところ、1月末現在で50ケ国から約 300点の資料を寄贈いただきました。まだ、すべての国がそろっているわけではありませんが、いずれも最新の正確な資料です。これらを今後大いに利用していただくためにコーナーを設置して自由に閲覧していただくものです。

「海外情報資料コーナー」の一部を紹介すれば次のようなものがあります。

アイルランド：「アイルランドという国」
インドネシア：「インドネシアとその文化」
モ ロ ッ コ：「モロッコの旅行」
シンガポール：「シンガポール　あれこれ」
タ　　イ：「タイ国エチケット集」
ナイジェリア：「今日のナイジェリア」

NEWS

■恒松知事、館内を視察

新春、仕事初めも程ない1月7日恒松知事が県立図書館を視察された。午前11時に来館された知事は、館長から県内市町村の読書施設の現状、またそれらに対して県立図書館が行っている読書普及活動の状況、さらに狭隘化が著しい書庫の実情等について説明をうけられたのち、熱心に館内のすみずみまで視察された。書庫に収容しきれない図書が約2万冊も通路に山積みされているのには、さすがに驚かれたようである。

県立図書館では、現在昭和70年までを目途に、30万冊を収容できる書庫・コンピューター室・資料室（拡張）等を併せ備えた施設が建設されるよう要望中なので、タイムリーな知事の視察は館長以下職員たちも喜ばしい限りであった。

昭和43年10月、今の館舎が建築されて以来、知事の県立図書館視察は初めてのことであり、読書に深い関心をもたれる学者知事としての一刻であった。

■島根県立図書館協議会開く

昭和55年11月18日午後、本年度第1回の島根県立図書館協議会（議長宗寂照県議、委員10名）が開催された。今回は①昭和55年度事業の概要、②昭和56年度予算要求の概要について説明し諮問がなされた。

56年度予算では、前年度に引続いて、モデル市町村を中心とした市町村読書普及活動の育成、図書館資料の整備等をさらに拡充すべく予算要求することになったが、とりわけ近来とみに狭隘化した書庫について、このままでは県民サービスが低下するおそれがあるとの判断から、①書庫をすみやかに増築すること、②開架資料室を拡大し、利用者が自由に閲覧できるスペースを十分確保すること、という内容の建議があり、この線にそって予算要求することになった。

■「子どもの集い」多数の参加者でにぎわう

12月21日（13：30～15：30）県立図書館集会室において恒例の「子どもの集い」が開かれた。約 200名の子どもたちが参加し、きり絵昔話「花さき山」のOHP・「ジャックと豆の木」の人形劇・インタビュー「ぼく、私の読んだ本」・映画等の催しに楽しい一時を過ごした。終了後は、「子ども室」で図書の貸出しをうける子どもも多く、終日、大にぎわいであった。